2016 決定

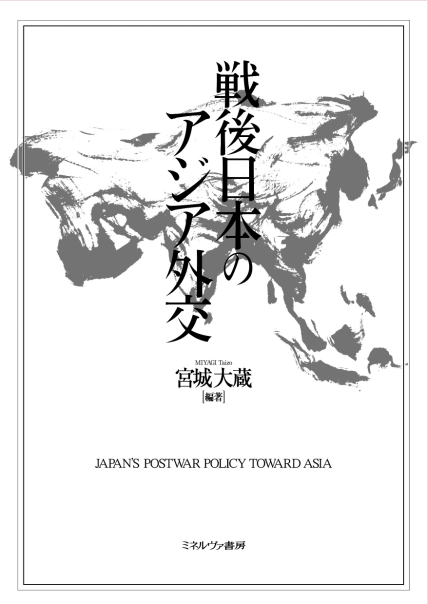
第20回 国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASID

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第20回（2016年度）の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



宮城 大蔵 編著

『戦後日本のアジア外交』（ミネルヴァ書房） 2015年

これまでの受賞作品

第 1 回　廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会　1997年
　　原　洋之介著『開発経済論』岩波書店　1996年
第 2 回　絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社　1997年
　　深川由起子著『韓国・先進国経済論 －成熟過程のミクロ分析－』日本経済新聞社　1997年
第 3 回　中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣　1999年
　　辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合 －構造調整政策下における役割と育成－』日本経済評論社　1999年
第 4 回　峯　陽一著『現代アフリカと開発経済学　市場経済の荒波のなかで』日本評論社　1999年
第 5 回　黒崎　卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店　2001年
　　西川　潤著『人間のための経済学－開発と貧困を考える』岩波書店　2001年
第 6 回　石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店　2002年
　　脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治－開発の中の英領インド』名古屋大学出版会　2002年
第 7 回　平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社　2002年
第 8 回　石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社　2003年
　　安原　毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論　2003年
第 9 回　藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会　2005年
第10回　谷　正和著『村の暮らしと砒素汚染－バングラデシュの農村から』九州大学出版会　2005年
第11回　湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社　2006年
第12回　牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited　2007年
第13回　武内進一著『現代アフリカの紛争と国家 －ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店　2009年
第14回　田辺明生著『カーストと平等性 －インド社会の歴史人類学』東京大学出版会　2010年
第15回　該当作なし
第16回　佐藤百合著『経済大国インドネシア－21世紀の成長条件』中央公論新社　2011年
第17回　森　壮也・山形辰史著『障害と開発の実証分析 －社会モデルの観点から』勁草書房　2013年
　　山尾　大著『紛争と国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店　2013年
第18回　柳澤　悠著『現代インド経済－発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会　2014年
第19回　古川光明著『国際援助システムとアフリカ－ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社　2014年

宮城 大蔵 編著
『戦後日本のアジア外交』

（ミネルヴァ書房）

審査委員選評

本書は、日本が戦後 70 年余にわたりアジアとどのような関係を構築してきたかを多面的に綴った本格的な通史である。編者である宮城氏を含む 7 名の執筆者は、アジア外交史の第一線の研究者であり、それぞれの専門分野の最新の学術成果を反映した魅力的な書物に仕上がっている。単著ではないが、編者が描いた構図のもとで、時代ごとの史実が全体として一貫性をもって提示されている。

21 世紀の今日、「アジアの活力を取り込む」ことが日本の成長戦略の要諦になっている。今や、「アジアの中の日本」は自明とされる。しかし、本書を通じて戦前の歩みや、戦後から現在にいたる史実を学べば、同地域の国々と日本の関係は単線的でなく紆余曲折があったこと、日本にとって「アジア」という言葉自体が、範囲も力点も時代によって「伸縮自在」で可変的なものであったことが分かる。

第二次世界大戦で日本はアジアに侵攻した。戦後日本は、賠償交渉や経済協力を通じてアジア各国との関係の正常化に、実に大きなエネルギーと外交努力を払ってきた。当然ながら、「負の遺産」をもつ日本に対する、アジア各国の反応はさまざまであった。その後、日本は驚異的な復興・発展を遂げ、アジアで最初の先進国、経済大国になった。そして今、かつての「停滞のアジア」は「繁栄のアジア」へ変貌をとげ、韓国・中国等の新興国の台頭は著しく、日本の経済面での相対的地位は低下しつつある。

本書の重要な伏線は、戦後日本がアジアと関係構築を図るうえで政府開発援助（ODA）を含む官民の経済協力が果たした役割を分析し、散りばめていることだ。戦後賠償、福田ドクトリン（1977 年）、日中平和友好条約の締結と対中円借款供与の開始（1979 年）、プラザ合意（1985 年）やアジア通貨危機（1997 年）後の裾野産業育成・産業高度化支援など、日本は常に「対米協力」と「自主外交」のバランスをとりながら、インフラ開発・人材育成・産業協力など、経済面を中心に、アジア地域秩序の構築を担ってきた。

新しい時代に入り、日本は今後、アジアとどのような関係を構築していくのか、アジアでどのように官民協力を展開していけばよいか。本書はこうした問いかけへの、貴重な知的基盤を提供している。その意味で、開発協力・経済協力に取り組む官民の実務者やビジネスマンにとって必読書といえよう。

（大野 泉）

受賞者の言葉

この度、われわれ 7 人の手になる『戦後日本のアジア外交』が「国際開発研究 大来賞」を受賞したことを本当に嬉しく、また光栄に思います。編者として、執筆者一堂を代表して選考委員の方々をはじめ関係者の皆さまに、まずは心からの御礼を申し上げます。

特に国際開発研究、そして大来佐武郎の名を冠した賞をいただいたことを、ことのほか嬉しく思っております。その理由は後述致しますが、本書はミネルヴァ書房から大学のテキストにも使うことのできる通史をとのご提案を受け、それならば「戦後日本とアジア」をテーマにした通史をということで始まった企画でした。近年に至るまで戦後日本の対外関係といえば、日米関係がその中心でした。サンフランシスコ講和条約に始まり、安保改定や貿易摩擦などを挙げてみれば、戦後日本の歩みにおける対米関係の圧倒的な比重が思い起こされます。

そのような中にあってアジアとの関係は、東南アジア諸国に対する賠償や日韓、日中との国交正常化のように広い意味での戦後処理が中心であり、戦後外交の通史においては、その都度個別に言及されるといった扱いでした。また、絶え間ない戦乱と混乱で彩られた 1960 年代頃までのアジアと、「一国平和主義」の道を歩んだ日本とは、およそ共有するものがないかに見えましたし、日本は戦後版の「脱亜入欧」さながらに「先進国」への道を猛進したといえます。

しかし 21 世紀の今日、アジアとの関係は紛れもなく日本の対外関係において主役の座を占めています。日米同盟が日本外交の足場であることに変わりはありませんが、台頭著しい中国との関係を中心に、アジアとどう向き合うかが今後の日本の命運を左右するといって過言ではないでしょう。

戦争の過去や領土をめぐる軋轢もあるだけに、アジア近隣諸国との関係は時に感情的なものとなり、事態を混迷させる危険もあります。現在を形作っている近い過去にどのような問題があり、どのような知恵と努力によって解決、収束されてきたのか、戦後日本とアジアについて、バランスのとれた通史が今ほど必要とされている時はないと考えています。

さて、このような戦後日本とアジアの関係を振り返ったとき、そこで主役の座を占めたのは戦争賠償や、経済協力に始まる広い意味での開発援助であったことに気づかされます。日本とアジアの間に戦争が残した生々しい傷跡、貧困と停滞のアジアと日本との間に広がる深い溝を架橋したのも開発援助やそれを契機とした経済関係の深まりでした。1970 年代後半、経済成長に向けたアジアの胎動に耳をそばだて、環太平洋連帯構想として地域の未来像を鮮やかに打ち出したのが、言うまでもなく大来佐武郎でした。広く読まれるように、テキストとしても用いることができるようにと、一般的な通史の体裁をとった私共の『戦後日本のアジア外交』ですが、本書が内に含んだ大来に繋がる文脈とメッセージ性を見出して下さったが故に、今回の受賞に至ったと受けとめております。その意味で、われわれにとって、これほど啓発される受賞はありません。大来を軸としてわれわれも本書の意味を再確認し、さらに発展させていきたいと考えております。そのような契機を与えて下さいましたことに、改めて感謝申し上げます。

宮城 大蔵

みやぎ・たいぞう
1968 年東京都生まれ。立教大学法学部卒業後、NHK 記者を経て一橋大学大学院法学研究科博士課程修了。博士（法学）。北海道大学大学院法学研究科専任講師、政策研究大学院大学助教授等を経て、上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授。

主要著書
『バンドン会議と日本のアジア復帰』（草思社、2001 年）。『戦後アジア秩序の模索と日本』（創文社、2004 年．サントリー学芸賞、中曽根康弘賞奨励賞）。『「海洋国家」日本の戦後史』（ちくま新書、2008 年）。『戦後アジアの形成と日本』（編著、中央公論新社、2014 年）。『普天間・辺野古 歪められた二〇年』（共著、集英社新書、2016 年）。『現代日本外交史』（中公新書、2016 年）他。

執筆者（執筆順） 加藤 聖文（かとう・きよふみ） 国文学研究資料館准教授、楠 綾子（くすのき・あやこ） 国際日本文化研究センター准教授、井上正也（いのうえ・まさや） 成蹊大学法学部准教授、若月 秀和（わかつき・ひでかず） 北海学園大学法学部教授、佐藤 晋（さとう・すすむ） 二松学舎大学国際政治経済学部教授、大庭 三枝（おおば・みえ） 東京理科大学工学部教授

第20回 応募作品の傾向と選考経緯

2015年4月から2016年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、47件47作品の推薦・応募があった。
本年度の特徴は対象地域としては一国のみではなく、複数国／地域、国連機関を取扱う著作が多かった。アジア・ASEANは例年よりさらに増え35点、中国関係は特に多く、分野も多岐にわたった。アフリカは昨年より減じて6点、中東は今年は無く、大洋州・ラテンアメリカについて各1点あった。
分野は、経済/財政11点、政治（含外交国際問題）11点が昨年同様に多かった。人類学／農業／工業／都市計画は各2～3点であり、災害／防災／難民は減じて今年は無かった。FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて下記4点が最終審査対象として選出された。審査過程において審査委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。（書名五十音順）

西谷内 博美 著	『開発援助の介入論 –インドの河川浄化政策に見る国境と文化を越える困難』 東信堂
加藤　弘之 著	『中国経済学入門「曖昧な制度」はいかに機能しているか』 名古屋大学出版会
馬　欣欣 著	『中国の公的医療保険制度の改革』 京都大学学術出版会
國部 克彦、伊坪 徳宏 他 編著	『低炭素型サプライチェーン経営–MFCAとLCAの統合』中央経済社

『開発援助の介入論』は、大規模なODA借款事業の末端の現場で実際に起こった問題を分析しており、得られた教訓は案件監理をするうえで有用である。文化人類学的な視点を組織的に取り込むことの重要性を指摘しており、援助実務者にとって参考になる。荒削りだが、単著として意気込みを感じる。

『中国経済学入門』は、中国型資本主義の特徴を「曖昧な制度」という概念で整理し、市場経済移行プロセスの分析において開発経済学の視点も必要であることを示唆し、中国の独自性を強調している。中国経済発展を理解するにあたり、重要な視点を提供している。

『中国の公的医療保険制度の改革』は、中国の公的医療保険制度の改革という重い課題の原因と解決策を、厳密な社会科学的方法で提示している点で第一級の研究書である。計量的実証分析や「社会実験」などの組み合わせにより、企業や人々との集合的行動を描き出した上で、あるべき制度を明確に描き出している。途上国、先進国を問わず広く政策担当者、研究者に読まれるべき良書である。

『低炭素型サプライチェーン経営』は、SDGsの時代に低炭素化というグローバルな課題に対して、会計学、経営学、サプライチェーンなどを組み合わせた具体的な分析と解決方法を提示している点が、斬新である。研究者や実務家に今後の低炭素化戦略に具体的な方向性を示している。

【第20回（2016年度）審査委員会】

委員長　杉下 恒夫（FASID理事長）
委　員　荒木 光弥（国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹）
絵所 秀紀（法政大学 教授）　大野 泉（政策研究大学院大学 教授）
滝澤 三郎（認定NPO法人 国連UNHCR協会理事長、東洋英和女学院大学院 客員教授）
岡田 尚美（FASID専務理事）

表彰式・記念講演会　ご案内

日　時	2017年2月21日（火）15：00～16：15
講　演	**戦後アジアの形成と日本 ー賠償・経済協力・開発援助を手がかりとして**　宮城 大蔵 戦後日本とアジアとの関係を考察する際、戦争賠償・経済協力・開発援助が日本にとって関係（再）構築の主たる手段であったことが見て取れる。それは日本と相手国との二国間関係のみならず、1950年代、60年代、70年代～と、それぞれの時期におけるアジア国際秩序において重要な意味を持つものであった。本講演では①日本のアジア外交、②賠償・経済協力・開発援助、③アジア国際秩序の三者のあいだの接点を論じる。
会　場	FASIDセミナールーム（港区麻布台2-4-5　メソニック39MTビル6階） 地図　http://www.fasid.or.jp/about/8_index_detail.shtml（最寄駅：日比谷線神谷町、大江戸線赤羽橋）
参加費	無料（要申込・座席定員制）　※表彰式・記念講演に続いて、懇談会を同会場で催します。
バリアフリー関係	手話通訳者を、配置する準備があります。会場のビルには車イスで利用可能なトイレがあります。
申込み・締切り	お名前・ふりがな、ご所属、電話（昼間連絡できる先）を（okita@fasid.or.jp）へemailにてお送り下さい。定員になり次第、締切らせて頂きます。 ※手話通訳が必要な方は、申込みのemailに記して下さい。通訳者を配置致します。
主催・お問い合わせ先	FASID国際開発研究 大来賞事務局（服部）　email: okita@fasid.or.jp ／ Tel: 03-6809-1997

2017 募集

第21回 国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。
第21回（2017年度）についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

（1） 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書（翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く）であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。

（2） 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。

（3） 2016年4月1日から2017年3月31日までの間に、初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎（おおきた さぶろう）氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会（ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会）の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める（～80年）。
その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

表　彰　審査委員会で選考された作品に対し、正賞（楯）と副賞（50万円）を贈呈します。

審　査　当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募

推薦者（自薦・他薦可）は、所定の推薦書へ入力し、email添付により送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦して下さい。なお、推薦書類・当該図書は返却致しませんのであらかじめご了承下さい。

推薦書　ダウンロードしてください。

http://www.fasid.or.jp/award_detail/2_index_detail.shtml

締　切　~~2017年6月2日（金）~~ 締切延長しました 2017年6月15日（木）

受賞作品の発表と表彰式

2017年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。（予定）

推薦・お問合せ先

一般財団法人 国際開発機構
国際開発研究 大来賞事務局（服部）
TEL:03-6809-1997　email:okita@fasid.or.jp

一般財団法人 国際開発機構 国際開発研究センター
Foundation for Advanced Studies on International Development
〒106-0041 東京都港区麻布台2–4–5 メソニック39MTビル6階
email：okita@fasid.or.jp　TEL：03-6809-1997　FAX：03-6809-1387　http://www.fasid.or.jp